

「石丸繁子書道展」作品目録

平成27年11月22日(日)～11月28日(土) 子規記念博物館

タイトル ; 『虚子の姿』— 近代文学の大俳人高濱虚子 八十年の業績

コンセプト :

今展は、虚子のファンになって二度目の挑戦である。

虚子の生き方に驚くようなドラマ性はない。だが、俳論「深は新なり」「写生」この言葉は、特に私の琴線に響き心を高揚させた。これらは、書制作のプロセスにおいて、紙面に大いに反映されたのである。それは、虚子のいう表現上の技術であり、「力強い句」を示唆している。虚子は常に心眼を見開き、一貫したその理念と自信を堅持しながら、強大な力で俳句界をリードしていった。まさに、これが虚子八十年の業績であり、近代文学の大俳人たる姿といえる。

虚子が描く十七音のメロディは、今だ私の想像力を駆り立ててやまない。虚子の「俳句の力」にカンパイ。

虚子の決意 — 「文学上に功名を立て世に立つ」

散る梅の掃かれずにある窪みかな	明治29年	季題「散る梅」	季節「春」
廻廊も鳥居も春の潮かな	明治29年	季題「春の潮」	季節「春」
座を擧げて戀ほのめくや歌かるた	明治39年	季題「歌かるた」	季節「冬」
桐一葉日當りながら落ちにけり	明治39年	季題「桐一葉」	季節「秋」

虚子の宣言 — 俳壇復帰「守旧派」

我心或時輕し芥子の花	大正3年	季題「芥子の花」	季節「夏」
どかと解く夏帯に句を書けとこそ	大正9年	季題「夏帯」	季節「夏」
白牡丹といふといへども紅ほのか	大正14年	季題「牡丹」	季節「夏」
大空に伸び傾ける冬木かな	大正15年	季題「冬木」	季節「冬」

虚子の標語(俳論) — 「花鳥諷詠」・「客観写生」論を提唱

思ひ川渡れば又も花の雨	昭和3年	季題「花の雨」	季語「春」
ふるさとの月の港をよぎるのみ	昭和3年	季題「月」	季節「秋」
紅梅の蒼は固し不言	昭和8年	季題「紅梅」	季節「春」
川を見るバナナの皮は手より落ち	昭和9年	季題「バナナ」	季節「夏」
鯖の旬即ちこれを食ひにけり	昭和12年	季題「鯖」	季節「夏」
口あけて腹の底まで初笑	昭和17年	季題「初笑」	季節「冬」
炎天に立出でて人またたきす	昭和19年	季題「炎天」	季節「夏」

虚子の信仰 — 「存問」・「俳句は極楽の文学である」

初蝶來何色と問ふ黄と答ふ	昭和21年	季題「初蝶」	季節「春」
鬪志尚存して春の風を見る	昭和25年	季題「春風」	季節「春」
彼一語我一語秋深みかも	昭和25年	季題「秋深し」	季節「秋」
明易や花鳥諷詠南無阿彌陀	昭和29年	無題	

※ 表記は、『定本高濱虚子全集』による。

※ 目録は、年代順に列記。(作品展示とは、一部異なる)